

今の自分の原点を 忘れずに

ものづくり

本田屋本店有限公司 代表取締役

本田勝之助さん

【福島県】

復興
とは？



本田勝之助

株式会社ジェイアール東日本企画が運営する、未来への「じまんの一品づくり」プロジェクトのコーディネーターを務める本田さんは会津若松市の出身。震災後、現代のライフスタイルに合った魅力的な商品を生みだそうと尽力している。数々の地域創生プロジェクトで全国を奔走している本田さんの伝統産業への思いや取り組みを語っていただく。

中高生へのメッセージ

これからの時代はクリエイティブな人なのか、ノン・クリエイティブな人なのか、はっきり分かれる時代。これを求めている、これが欲しかったというものを思いつき、仲間と一緒に取り組むことが社会に求められると思います。

震災以前のこと

うちは代々青果問屋だったので、家業を継ぐような思いで、農業者のブランディングやその販路開拓など、食のプロデュースの事業を主に取り組んでいます。こととしておおよそ10年目になります。

震災から現在

大震災の揺れがあった時には、会津若松にある会津木綿の工場にいました。物凄く揺れましたけれど、その後も仕事をこなして会社に戻ったら、棚が全部倒れていて、社員は誰もいなかったんです。「何かひどいことが起きたんだ」と思って実家に行ったら、家族の顔つきが全く違っていました。そこにあつたテレビを見て、事態がようやく分かりました。これまで、一緒に食のブランド化などに取り組んでいたお客さんが住む町が、まさに津波に飲まれている。とにかくその人たちのことが気がかりで仕方ありませんでした。

原発の事故が起きた時は、放射性物質自体がどのくらいの強さで、どこに向かっているのか。まずこの福島含め会津にいて大丈夫なものなのか、すぐに私たちも避難すべきなのかどうか。情報を集めながら考え悩んでいました。

考えた末に、福島への短期的な支援はできる人が多いので、長期的に福島と共に頑張っていこうという人を探し始めました。福島と共に福島で働くということも思ってくれる企業、人はいるのかどうか、福島の人たちは不安に思っていました。いるのであればそれを実感として感じたいと考えたんです。何社も手を挙げてくれました。結果的に難しいという結論に至った企業も多いのですが、福島に拠点を構えて、復興のために福島のために動いてくれる企業は出てきました。震災以降、「何か力になれば」と言ってくれた人たちの思いは本当に本物で、ある意味一流の方たち、十分な力を持っている人たちが「福島のためになら力になろう」と言ってくれました。

ブランドでいえば、震災前は、地域の特徴を考えてつくった独自のブランドの数はそれほどなかったんですが、震災後はそれをしなくても売れないし、そういった商品を応援したいという人たちが増えました。被災地の中でひたむきに支援をしている人の姿などを見て、産品自体の価値よりも、そこに心を動かされたって人が多いですね。物を見る視点が、その先の物を作っている人の取り組みや思いに関心が移っていったと思います。

将来のビジョン

会津では三つの恩を説くんですよ。一つは両親、もう一つは先生、三つ目が地域。やはり何だかんだ言っても、今の自分がある原点を忘れずに、家族のもとで、家族が喜ぶことを、そして今までお世話になった先生たちにとって喜んでくれることを、地域のためになることを、やるのが結果的には一番後悔のない人生になるのかなと思っています。